

民謡を訪ねて 続篇
(久しぶりに出遭ったオモシロイ書籍)

<1> はじめに

その昔「日本の民謡」という小さな本を持っていて、暇な時にパラパラ見たり旅に出る時に荷物の中に突っ込んでおいたりでかなり役に立っていた。本棚を探したが見つからないので、おそらく度重なる転居の結果どこかへ消え失せたものと諦めたが、代りが欲しくなった。

ある朝新聞を見ていたら、最下段の書籍の広告欄に「日本の民謡曲集 I・II (故郷の心のあの歌この歌)」と載っていた。インターネットで調べて見たら、全国の民謡を二冊に分冊して160曲ほど載せており一部の曲は楽譜も載っていると書いてあった。

e-hon (インターネットで注文して最寄りの書店で入手) を使って申込み、程なくして手に入った。きれいな装丁で第一巻 (I) は北海道・東北・関東・甲信越編、第二巻 (II) は北陸・近畿・山陰山陽・四国・九州・沖縄編となっている。トイレで、寝床で、暇な時に読む(見る?) 生活が始まった。

民謡は、「正調と言われるオリジナル」から「近代化された現代版」まで、また「歌謡曲歌手が歌うことで歌謡曲化したもの」など、時代の流れの中で曲や歌詞が様々に変化してきている。読んで見たら意外な歌詞が付け加わっていたりもするので、時には感心したり、時には失望したりということもある。



<2> できごと

おもむろに一冊目を開いて見ると「江差追分」で始まり、前唄・送り囃子・本唄・後唄と楽譜付きで丁寧に示されていた。次は「ソーラン節」そして「北海盆唄」、ここまできてちょっと気になったことがひとつ、ひたすら唄が載っているだけで解説も補足説明も何もない。これは少々物足りないなと思いながら頁を先へ進めて行くと青森県に入り「鱒ヶ沢甚句」になった。

「西の八幡 港を譲る 主の留守居はノー嬢 (かか) まもる ソリヤ嬢まもる 留守居はノーオ嬢まもる」港の守護神である八幡様が「港を譲る」というのは常識的におかしい、後続のセンテンスが「留守居は嬢守る」であれば先行するセンテンスは「港を守る」でないとおかしい。インターネットでいくつかの情報を調べてみた結果、私が感じた違和感は正しいことがわかった。

「弥三郎節」の一番「ひとつあえー 木造新田の相野村・・・」となっていたが、私が知る限りでは「木造新田の下相野・・・」が正しいような気がする。だが、もしかするとこういう歌詞も存在するのかもしれない。

秋田県に入って「生保内節」の四番は「なんぼかくしても生保内衆は知れる わらで髪結ううてノオ網笠で」。

「髪結ううて」は送り仮名がひとつ多いということはすぐにわかるが、次にあり得ない物が登場する。

「網笠」は誤りで、正しくは「編笠」ではないか。網の笠なんか笠の役目を果たさない。

そして長野県に入り「伊那節」、この唄はしばしば耳にした唄で好きな曲のひとつなのでじっくり読んで見た。

「木曾へ木曾へとつけ出す米は 伊那や高遠の余り米」で始まる。この一節は「伊那や高遠の涙米」などいくつかの歌詞が存在するらしい。三番まで来て愕然とし、また怒りに似たものが込み上げてきた。

「わしが心と御嶽山のソリヤ 蜂の氷は 蜂の氷はいつ解ける」。「蜂の氷」が「蜂の氷」と誤記されたということしか考えられない。日本語を理解している人ならば誰でも「蜂の氷」という言葉がおかしいことに気がつく筈で、誰の目で見ても低次元の誤りであることは明らかである。

「一体この本には誤りがどの位あるのだろうか？」伊那節をきっかけに、私がこの本に向かう姿勢が変わってしまった。もう一度江差追分に戻って鉛筆を片手に二冊を一気に読み進み、気になる所に書き込みをした。

そしてその後で、気になった場所の検証を行って朱書きのコメントを書き込んで行った。

すべてを紹介するのは困難なので、その中のいくつかを選び出して以下に記して見る。

「富来（とぎ）祭唄（石川県）」の一節、「娘島田に喋々がとまる とまる筈だよ花じゃもの」。喋々がお喋りになってしまったとは・・・。

「宮津節（京都府）」の一節は物凄い、「わしとお前はお蔵の※よ いつか世に出てままとなる」。「米」という字が「※」に化けることなど常識の世界にはあり得ない。

「よさこい節（高知県）」では丁寧に二か所もやってくれた。「土佐はよい国南をうけて 薩摩風がそよそよと」、正しくは「土佐はよい国南をうけて 薩摩風（さつまおろし）がそよそよと」。

「西に竜串 車に室戸 中の名所が桂浜」、正しくは「西に竜串 東に室戸」、西の後にくる言葉は東であろうことぐらいもわからないのか。ことによると、元の原稿を書いた人の筆順がおかしいか酷い字体だったか。

「五木の子守唄（熊本県）」の一節、「おどんが打死んだちゅうて だいが泣あてくりゅうきや 裏の松山蟬が鳴く 浦の松山蟬が鳴く」。リフレインなので同じ言葉が出て来るべきであること、山の中の五木に海を現わす「浦」という言葉が不自然でないか、そのようなことも理解していないのか。

<3> なぜなの

ここで気がついたことを整理して、原因（背景）を想定して箇条書きにして見ると・・・。

- ① 誰かの手書きの原稿を、第二の人が書き写して本原稿を作り、それを元に第三の人が機械入力した？
- ② 手書き原稿を書いた人はほぼ正しく書いたのだろうが、ひどい「癖字」だった？
- ③ 第二・第三の人は、「風」「蝶」など古い文字（言葉）をあまり良く知らない「若者世代だろうか」？
- ④ もしかすると、第二・第三の人は「西と東」という対語や「浦と裏」という同音異語を知らぬばかりか「峰と蜂」の区別がつかない人間、つまり日本人ではないのではないのか？
- ⑤ 校正は一度もやられたとは思えない。もしくはやったとしても前述の「日本語を正しく理解していない人が作った誤記資料」を見ながら、「日本語を正しく理解していない人が校正した」としか思えない。また、この間の作業も日本語を理解していない人（外国人？）が携わった？
- ⑥ そして、この分野の関係者の検証も経ていないだろうし、最後に商品として出荷する前の検査は一切やられていない。

<4> おわりに

二冊買って税込1,728円、前代未聞のひどい書籍を買ったなという印象は拭えない。真剣に読んだら腹が立つような本であったが、しっかり目を通して見た結果は「大変おもしろい本」だった。

発行は「メトロポリタンプレス 東京都板橋区板橋 3-2-1 電話 03-5943-6430」、編著者は「神田虔十」と巻末に記されている。神田虔十と言う方は唄に関する書籍をいくつか出している方のようなのだが、私はその道に疎いので、どの程度の方なのかはわからない。

最後に発行したメトロポリタンプレスという会社のホームページを見たら、「会社設立の目的」というところにこんなことが書いてあった。

- ① 人生を愉しみ、仕事を楽しむことによって、創造性と進取の気象を発揮し、時代の変化に対応し、自己の夢を実現する
- ② 社会的使命をもって、世界中の人々の精神性と知識の向上、平和と社会の発展に貢献する
- ③ 人々の仕事、日常生活、生き方に役立ち、豊かさを与える本やサービスを提供する
- ④ 研究心が旺盛で、自由闊達な社風を醸成し、オリジナリティに溢れる出版活動を展開する
- ⑤ グローバルな活動を目指し、日本から世界への情報発信を強化する
- ⑥ 21世紀にふさわしい出版とサービスを徹底する

以上